I-4

宮内嘉久による「建築ジャーナリズム史」の成立経緯について

On context of architectural journalism history by *Yoshihisa Miyauchi*

○川嶋勝 [1]，大川三雄 [2]，矢代眞己 [1]，田所辰之助 [2]
*Masaru Kawashima [1], Mitsuo Ohkawa [2], Masaki Yashiro [1], Shinnosuke Tadokoro [2]

1. はじめに

近代日本の建築出版活動は、西洋建築技術の輸入における翻訳行為にはじまるように、世界的にも特異な文化を築いてきた。なかでも戦前期のモダニズム導入を牽引した専門誌の諸相は「建築ジャーナリズム史」として、とくに建築評論家・宮内嘉久（1926-2009）によって論陣が張られた。それは自身の東京大学卒業論文（1949）で「しぜんにできた造語」とされたが [1)]、現在その論考は継承されていない。本稿では、宮内による「建築ジャーナリズム史」の成立経緯として、その卒論と戦前期建築運動との関わりについて考察する。

2. 宮内の卒論「近代日本の建築イデオロギー」[a]

1920 年以降が「建築ジャーナリズムの開花」とされ、建築専門誌の系譜にも触れられている。しかし、副題に「ジャーナリズムを通して」と付されたように、「あくまでもジャーナリズムの視点で、建築思潮と建築運動の関連を歴史的に捉え」ることが企図された [1)]。そのために本論のトピックスは、たとえば建築学会での様式論争（1910）が「建築論的思考の発生」、分離派建築会結成（1920）は「新旧イデオロギーの対立抗争」の狼煙、岡村蚊象の講演「合理主義反省の要望」(1929) が「プロレタリアートのよる建築理論の獲得」の糸口、Dezam の「建築と建築生産」（1933）が建築運動の「理論的武器」になったと評されている。

こうした叙述や時代区分は、宮内の晩年に至るまでほぼ変わっていない（表 1-A）。その論陣は卒論で形成され、建築専門誌そのものの歴史よりも「建築思潮と建築運動」の史的叙述が主眼とされつづけた。それは「建築ジャーナリズムを、それとしてしっかり成立させなければ」[1)] と決した宮内による建築ジャーナリズムの職能論とも考えられる。その背景の検証として、宮内卒論の参考文献から建築運動を扱った西山夘三と高橋寿男による 3 本の論考を比較する（表 1-B）。

3. 西山夘三「建築家のための建築小史」[d]

京都帝国大学での卒論（1933）の序文が「補筆訂正」され、『国際建築』誌に「唯物史観による全建築史の見直し」として紹介、連載された [2)]。建築史家による従来の様式史から脱却し、建築の「生産方法」をもとに史的考察を求める唯物史観は、石原憲治や岡村蚊象、原沢東吾らによる建築史研究の共通テーマとされた。これらの論考は、のちに宮内に重視されている。

西山による本論の企図は「社会の発展と建築、建築運動との関連に於いてこの最も興味ある『建築のイデオロギー的部分』の発展を主として明白にしよう」[2)] とされた。これは、前項の冒頭で引用した宮内卒論の企図と類似する。しかし西山は、たとえばグロピウスらを叙述する際も、その理論はプロレタリア芸術論の訳書に負いながら、「建築家層のイデオロギー的発展の過程」にそって分析している [2)]。

つまり西山の主眼は、「歴史を科学とし」て「成立せしめた唯物史観」による「建築一般の歴史的発展の解明」に定められていた [2)]。宮内が眼目とした「新旧イデオロギーの対立抗争」との性質の差異を指摘できる。

4. 西山夘三「日本折衷主義と我国の建築運動」[e]

次項の高橋論考とともに、『建築と社会』誌 1937 年 6 月号の特集「近世日本建築文化運動」に寄せられた。のちに西山の著書へ所収された際は「日本建築運動小史」と改題されたように [3)]、1930 年代までの「建築論の変遷と、建築運動を概観」している [2)]。

そのトピックスは、様式論争から建築運動体や各論考の抽出まで、宮内のそれと大部分が重なる。1910 年の様式論争については、倉方俊輔によると「分離派前史」として着目されたのは 1950 年代の史的研究であり、ここに「日本近代建築史」の「基本的なトピック」が揃ったとされる [4)]。しかし、同様のトピックスの抽出は、少なくとも戦前期の西山に遡ることが認められる。

1：日大短大・教員・建築　2：日大理工・教員・建築

5. 高橋寿男「青年建築家クラブを顧みて」[f]

「戦前に書かれた建築運動小史としても貴重」[5] と評される本論のトピックスは、前項の西山とほぼ重なる。また、建築運動の時代区分が示されたことが特記できる。1920 年代前半は分離派建築会などの「芸術的なるもの」、1920 年代後半は日本インターナショナル建築会により「技術が前面」に出はじめ、1930 年代は「急進的な思想」ゆえに新興建築家連盟が解体ののち、「科学的に観る方法」に収斂したと整理された。そして Dezam が「画期的な研究『建築生産』」を発表し、建築運動に「強力な理論的武器を与えた」とされる。この前後の運動体は、高橋も主導者のひとりであった[6]。

つまり、宮内による Dezam への脚光や建築運動史の叙述には、戦前期の当事者によるトピックスや時代区分が受け継がれていた。本論が発表された 1937 年の時点で「そろそろ歴史的存在となった分離派建築会」[7] と回顧されたように、建築運動の史的叙述が当事者によって着手されていたことを示している。

6. まとめ

宮内嘉久の「建築ジャーナリズム史」は、西山夘三ら戦前期建築運動の当事者による叙述が踏襲された建築思潮史といえるものであった。日本のモダニズム建築の史的叙述は、建築運動にはじまることが多いが、その端緒は 1930 年代の当事者による証言に見出すことができる。そうした一次資料に何らの検証も加えられないまま、唯物史観の建築史を求めた戦前期の論考とともに、宮内に思想闘争の歴史として継承され、建築ジャーナリズムの職能論へと転換されていった。

引用・参考文献

1) 宮内嘉久『少数派建築論』、井上書院、1974 年（【a】を所収）
宮内が自らの造語とした「建築ジャーナリズム」は、西山夘三「建築批評の問題」（『国際建築』1935 年 10 月号）などに先例がある。
2) 西山夘三『西山夘三著作集 4 建築論』、勁草書房、1969 年（【d】【e】を所収）
3) 西山夘三『建築史ノート』、相模書房、1948 年（前掲 2 に同じ）
4) 倉方俊輔「「日本近代建築」の生成――「現代建築」から『日本の近代建築』まで」、『10+1』no.20、2000 年 6 月
5) 村松貞次郎編『日本科学技術史大系 第 17 巻 建築技術』、第一法規出版、1964 年
6) 高橋寿男著、西山夘三編『建築・住宅・都市計画』、相模書房、1962 年（【f】を所収）
7) 特集「近世日本建築文化運動」、『建築と社会』、1937 年 6 月号
8) 西山夘三「建築家のための建築小史」、『国際建築』、1933 年 8 月号－1934 年 1 月号（【d】）
9)『世界建築全集 9 近代』、平凡社、1961 年（【b】を所収）
10) 宮内嘉久「20 世紀における建築ジャーナリズム思潮の変遷」、『建築雑誌』、1999 年 9 月号（【c】）

表 1　宮内嘉久の論考とその卒論の参考文献の比較

［1-A］　宮内の論考における叙述のトピックス

［1-B］　宮内卒論の参考文献における叙述のトピックス

【d】西山 1933	【e】西山 1937	【f】高橋 1937	西暦	トピックス	【a】宮内 1949	【b】宮内 1961	【c】宮内 1999
					前史的風景：1868-1919	［建築ジャーナリズム史区分］	前史的段階：1887-1910
			1886	造家学会（現・日本建築学会）創立	○		○
			1887	『建築雑誌』創刊	○		○
			1907	『建築世界』創刊	○		○
			1908				
	○		1909	伊東忠太「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」（建築雑誌	○		
	○	［建築運動史区分］	1910	建築学会討論会「我国将来の建築様式を如何にすべきや」（建築雑誌 1910.06, 08所収）	○	［建築運動史区分］	建築運動の水脈：1910-25 ○
	○		1914	東京大正博覧会		○	
	○		1915	野田俊彦「建築非芸術論」（建築雑誌1915.10所収）	○		○
○	○	○ 第1期 1920-25・26	1920	分離派建築会結成	○	○ 転換の時代：1920-30	○
			1921	雑誌『種蒔く人』創刊	○	○	
			1922		建築ジャーナリズムの展開：1920-30（建築運動は前進する：1927-30）	○	
○	○	○	1923	創宇社結成	○	○	○
	○		1924	メテオール結成		○	
	○			ラトー結成		○	
	○	○		マヴォ結成		○	
			1925				激流の時代――『国際建築』『新建築』創刊から敗戦まで：1925-45
		第2期 1926-31・32	1926	伊藤清造「建築のプロレタリズム」（建築新潮1926.07）	○		
				蔵田周忠「建築論」（『アルス建築講座』所収）	○		
○	○	○	1927	日本インターナショナル建築会結成	○	○	
				石原憲治「必然の建築」（科学画報 1927.12）	○	○	
			1928	岡村蚊象「新建築における唯物史観」（アトリエ1928.09）	○	○	
				全日本無産者芸術連盟（NAPF）結	○	○	
	○		1929	第1回建築思潮講演会	○	○	
	○			同上、岡村蚊象「合理主義反省の要望」（国際建築1929.11所収）	○	○	○
				同上、牧野正己「建築思潮を語る」（建築雑誌1929.10所収）	○		
○	○	第3期 1930-今日（1937）	1930	新興建築家連盟結成・瓦解	○	暗い流れ：1930-45 ○	○
				原沢東吾「唯物史観建築史創設の必要と建築の本質に就て」（建築雑誌1930.04）	○		
				谷口吉郎「ル・コルビュジエ検討」（思想1930.12）		○	○
			1931	帝室博物館設計競技	暗い流れ：1931-45	○	○
		○		Dezam成立	○		○
○	○	○	1932	日本青年建築家連盟結成	○	○	
○				Dezam「建築と建築生産」（Dezam1932.12）	○	○	○
	○	○	1933	建築科学研究会結成	○	○	
○		○		青年建築家クラブ結成	○	○	
－		○		香山三郎（西山夘三）「建築家のための建築小史」（国際建築1933.08-1934.01）	○	○	
				刀根川浩（原沢東吾）「建築学の科学性のために」唯物論研究	○	○	
				高橋寿男「分離派建築会の通った道」（建築1933.12）			
			1934	火曜会結成	○	○	
			1935				
	○		1936	日本工作文化連盟結成	○	○	
	－		1937	西山夘三「日本の折衷主義と我国の建築運動」（建築と社会1937.06）	○		
		－		高橋寿男「青年建築家クラブをかえりみて」（建築と社会1937.06）			

【a】宮内嘉久「近代日本の建築イデオロギー――ジャーナリズムを通して」、東京大学卒業論文、1949 年
【b】宮内嘉久「日本の建築運動 1920-60――組織・創造・イデオロギー」、1961 年
【c】宮内嘉久「20 世紀における建築ジャーナリズム思潮の変遷」、1999 年
【d】西山夘三「建築家のための建築小史」、1933－1934 年
【e】西山夘三「日本折衷主義と我国の建築運動」、1937 年
【f】高橋壽男「青年建築家クラブを顧みて」、1937 年